

シノドスへの歩み みことばと共に キリストの聖体の主日 C 年

小西広志

2022 年 6 月 19 日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。今日は 2022 年 6 月 19 日、キリストの聖体の主日 C 年です。いつものように今日のミサの朗読箇所をシノドス的な観点から味わっていきましょう。今日は特にいつもとやり方を変えて、じっくりと福音朗読の箇所を味わってみましょう。

背景

今日の福音朗読箇所はいわゆる「パンを増やす」お話です（9 章 11b-17 節）。朗読箇所の前後を見てみると、9 章の冒頭でイエスさまは十二人を派遣します（1-6 節）。そして、ヘロデの戸惑いが伝えられます（7-9 節）、その後に今日の朗読箇所があって、そして 18 節からはペトロが信仰を言い表します（18-20 節）。「いたい、何者だろうだろう」（9 節）のヘロデのつぶやきのようなことは、19 節の「群衆は、わたしのことを何者だと言っているのか」というイエスさまの問いかけへと続きます。そして、その答えが「神からのメシアです」（20 節）というペトロのことばに表れます。つまり、今日の朗読箇所は「イエスさまって誰？」という問いかけと答えの中に挟まれて位置するのです。しかも、「使徒たち」（10 節）と呼ばれる十二人が戻ってきて、イエスさまに報告して、彼らと一緒にベトサイダの町に引っ込んだにも関わらず、群衆が追っかけてきた場面から読が始まります（10-11 節参照）。

そうしますと、今日の福音朗読の物語は第一にイエスさまがどなたであるかを明らかにするために、そして第二に、そのイエスさまに仕える「十二人」の役割を明らかにするためにあると考えてよいでしょう。

神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた

最初に気がつくたいのは「[そのとき、イエスは群衆に] 神の国について語り、治療の必要な人々を癒やしておられた」（11b 節）とあるように、イエスさまが神の国について語り、癒しの活動と結びついてパンが増えたということです。神の国を伝えるのはイエスさまのガリラヤでの宣教活動の中心テーマでした。そして、神の国が実際に来ていることを表すのがイエスさまの癒しの行為だったのです。イエスさまのことばを聴いて、そしてイエスさまに癒やしていただいた人々は、イエスさまと共に過ごす大きな食卓を囲むようになるのです。

群衆を解散させてください

イエスさまから派遣された十二人（1-6 節参照）は、ここで初めて自分たちが主体的に行動します。3 節で「袋もパンも金も持ってはならない」（3 節）とイエスさまに命じられた彼らが群衆の食事と宿泊（「日も傾きかけたので」を参照）の心配をするのはいささか奇異です。弟子たち自身がイエスさまの本当のころを知らなかったのでしょうか。「見つける」（エウリスコー）は他の共観福音書が「買う」（アゴラゾー）を使っているとは違っています。五千人もの人が食べ物と宿泊場所を「見つける」のはあり得ませんから、ここでは食べ物も泊まる場所もない絶体絶命な状況を十二人は語っているのでしょうか。この「十二人」という表現はイエスさまが 3 度目にご自分の最期を予告するまで『ルカによる福音書』では登場しません（18 章 31 節参照）。

あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい

13 節のイエスさまのことば「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」は『列王記下』4 章にある預言者エリシャのことば「人々に与えて食べさせなさい」（王下 4 章 42 節）を思い起こさせます。そこでは召し使いがどうして百人もの人々に分け与えられるでしょうと反論しますが、エリシャは同じことばを繰り返し、「彼らは食べきれずに残す」（43 節）と語り、実際にそうになりました。

福音の方では、イエスさまの要求に対し十二人は「パン五つと魚二匹しかありません」（ルカ 9 章 13 節）と答え、食べ物を買いに行かなければならないことが暗示されます。「このすべての人々のために」（13 節）は、直訳すると「これらのすべての民のために」となりますが、十二人、すなわち使徒たちの務めが示されているようです。つまり、彼らはすべての人々のために食事を調達する任務を任されていたのでしょうか。「人々」と訳されたのは「民」（ラオス）ですが、神の国が実現するのは「民」のなかになのです。

五十人ずつ

以上までのところは物語が示す絶体絶命の状況の説明となるでしょう。エリシャの物語では（王下 4 章 22-44 節）では大麦のパン二十個に対して百人の人々でした。つまり 1 対 5 の割合です。ここではパン五つに対して五千人ですから、1 対 1000 の割合となります。しかも男だけで五千人ですので、それ以外にも女性や子どもたちもいたことになります。「組」はギリシア語でクリシアですが、もともとは食卓の寝椅子を指すことばだそうです。そこから、食事を共にする一団、グループを指します。「座らせた」（カタクリノー）は『ルカによる福音書』にだけに見られる単語だそうです（4 回）。ここでも「十二人」の使徒たちの主体的な働きが求められています。注目したいのは、ここから後は「弟子たち」と表現に変わっている点です。

天を仰いで

16 節のイエスさまの動作、「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで」は、直訳すると「天を見上げて」となります。旧約聖書にはよく登場する表現です（創 15 章 5 節、申 4 章 19 節、ヨブ 22 章 26 節、二マカ 7 章 28 節）。続く「それらのために賛美の祈りを唱え」は直訳すると「それらを祝福して」となります。他の共観福音書とは異なって、イエスさまは神さまを祝福したのではなく、食べ物（パンと魚）を祝福し

たのでした。

16 節にある「天を仰いで」、「賛美の祈りを唱えて」、「裂いて」、「渡して」、「配らせ」たというイエスさまの五つの動作は、ミサの聖体制定のことばとつながります。しかし、こういった一連の動作はユダヤ人たちの通常の食卓でも見られるものだったそうです。エマオの物語でも復活したイエスさまがパンを取って祝福し、それを裂いて二人のお弟子さんたちに渡しました（24 章 30 節参照）。二人のお弟子さんたちは、イエスさまの動作を通してイエスさまであることに気づきます。今日の朗読箇所でもイエスさまの動作が、イエスさまがキリストであると証言するペトロの信仰告白へと続いているのではないのでしょうか。

満腹した

17 節では「すべての人が食べて満腹した」とあります。「満腹した」は『ルカによる福音書』にはよく登場することばです（6 章 21 節、15 章 16 節、16 章 21 節）。神の国の宴と関係しているのかもしれませんが。

今日の福音朗読では「十二人はそばに来てイエスに言った」（12 節）で始まり、「残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった」（17 節）と「十二」ということばで囲われていることに気づかされます。十二はイスラエルの十二部族を表すのでしょう。ですから、イエスさまがパンを増やしたお話は全イスラエルのための食事を暗示しているとも考えられます。

奇跡を行ったイエスさまへの反応はありません。ただ、18 節からイエスさまへの人々の誤解が述べられますし、その後で奇跡を見ても悔い改めなかったベトサイダの町を嘆くイエスさまのことばもあります（10 章 13 節）。そうしますと、今日の福音の物語での奇跡はお弟子さんたちに向けられたものなのではないのでしょうか。五千人もの人が空腹という絶体絶命の状態でのお弟子さんたちの無力、それに対応するイエスさまの力あるわざが対比されているように思います。こうして、改めてイエスさまとはどなたなのかに関心が向きます。その答えが「神からのメシアです」（20 節）となるのでしょうか。また、イエスさまを通じてお弟子さんたちも同じように力あるわざを行えることを教えてくれています。

まとめ

まとめに移りましょう。16 節に「群衆に配らせた」とあります。「配る」はギリシア語ではパラティセーミですが、広い意味をもった単語です。まず、「食物を差し出す」という意味があります（ルカ 11 章 6 節参照）。さらに、「ゆだねる、任せる」の意味にもなります。例えば『使徒言行録』では「そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます」（使 20 章 32 節）とパウロはエフェソの教会の人々を神さまにゆだねてエルサレムへと出発します。さらに「説明して論証する」の意味でも使われています。同じ『使徒言行録』で、パウロは「このメシアはわたしが伝えているイエスである」と説明し、論証した」（使 17 章 3 節）とあります。

ところで、イエスさまの最後のことば「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（ルカ 23 章 46 節）。ここでもパラティセーミが使われています。イエスさまは神の霊によって生まれ、神の霊によってご自分が神の子であることを証しされ、神の霊によって助けられ、導かれて宣教活動をし、最終的に神の霊によって十字架へと向かいます。その霊を父に「ゆだねた」のです。

東京教区の雨宮神父さまの解説を読むとつぎのようにありました。霊を父に「ゆだねた」イエスさまは、ミサの中で神のみことばで「説明して論証する」ことで天の国をわたしたちに教えてください、何よりもご自分の御体であるホスチアを「差し出して」、「配って」わたしたちをいのちへと招くのです。このいのちを受けたわたしたちはイエスさまがどなたであるかを人々に「差し出し」、「説明」するのです。主の御体であるご聖体を「配られた」わたしたちは、こうしてイエスさまをこの世にもたらしものとなるのです。

ではまた来週